



令和2年度 dec定時総会のお知らせ

令和2年度の定時総会を下記のとおり開催いたします。
詳細は、会員の皆様に後日文書にてご案内申し上げますので、
ご出席賜りますようお願いいたします。

◆日時：令和2年5月29日(金)

◆会場：京王プラザホテル札幌

※日時・会場ともに予定です。諸事情により変更になる場合がございます。

編集後記

気分的に晴れない日々が続いていますね。。。みなさん、いかがお過ごしでしょうか？とは言え、確実に春は来ているわけ。。。陽が長くなってきていたり、暖かい日が続いたり、何より積雪がなくなったことで何やら気分もウキウキモードになってしまいますが。。。3月の悲しい出来事としては、あの志村けんさんがお亡くなりになってしまったことです。。。昭和の人間としては、本当に驚き、いまだに信じられない気持ちでいっぱいです。。。心よりご冥福をお祈りいたします。(RW)

dec monthly vol.415

2020年4月1日発行

発行人 山口

登美男

発行所 一般社団法人

北海道開発技術センター 〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

TEL (011) 738-3363 FAX (011) 738-1889 URL <http://www.decnet.or.jp/> E-mail dec_info01@decnet.or.jp



Hokkaido Development Engineering Center

dec monthly

2020.4.1 vol.415 デックマンスリー



● Monthly Topic (マンスリートピック)

dec地域政策研究所セミナー

道の駅の『新たなステージ』と
『シーニックバイウェイとの連携』

dec Interview >>> 弟子屈町長、一般社団法人 全国「道の駅」連絡会 代表理事・副会長 徳永 哲雄 氏

1993年の登録開始以来、全国に1160駅を数える「道の駅」。そのさらなる進化を図ろうと、昨年、「道の駅」設置の市町村で構成する「全国『道の駅』連絡会」が一般社団法人化されました。同連絡会の副会長であり、長年、地元の「道の駅摩周温泉」について尽力されてきた弟子屈町の徳永哲雄町長をお訪ねしました。

「道の駅摩周温泉」(弟子屈町湯の島3-5-5/国道241号線沿い)は「道の駅」の草創期に登録され、今も先進モデルとして注目されています。

1993年に北海道第一号として登録されたのが、わが町の「道の駅」です。制度は創設されたばかりで、登録の条件は今ほど厳密ではなく、なんとか間に合わせてスタートしたという感じだったのではないかと思います。例えば、トイレは段差があり、とても清潔・快適とは言えなかったですね。

2000年に町長になってから、私はこれをなんとかしたいと考えました。ちょうど付近に建っていた「ヨーロッパ民芸館」という民間施設が廃業し、競売価格で安く売り出されたのを機に町で取得しました。ヨーロッパの山小屋風で、RC工法による建築的にもお金のかかった建物で、元の所有者は温泉源も付けてくれました。それを2011年にリニューアル・オープンさせたのが現在の「道の駅摩周温泉」です。

足湯が楽しみ、温泉暖房で常時、施設

全体が暖かいことが大きな特徴です。トイレも昔と違ってきれいで快適ですよ(笑)。農産物など地域の特産品販売の拠点であると同時に、絵や写真など町民の作品を展示する文化的な交流の場にもなっています。私はスイスの観光地ツェルマットを視察したことがありますが、街は花々で美しかった。あれにならって「道の駅」でもゼラニウムなど花を飾ることに力を入れています。費用は相当かかりますが、近くの高齢者がボランティアで手入れをしてくれたり、花を目的に近隣の人たちも立ち寄ってくれています。運営管理は町の観光課が行い、農産物などの販売は直売会が自主運営しています。指定管理で外部の業者に任せるのではなく、地域のみんなで盛り立てようと頑張ってきました。

「全国『道の駅』連絡会」では、「道の駅」の新しいステージとしてインバウンド観光や防災について一層、機能強化を図るようですね。「道の駅摩周温泉」の現状はどうでしょうか。

「道の駅摩周温泉」の観光案内所は、日本政府観光局の外国人観光案内所の認定を受けており、英語対応が可能ですし、今後はポキトークなど音声翻訳機も手軽に使えるようになるでしょう。町には光回線が整備されており、施設ではWi-Fiの接続も可能です。これからは5Gの時代で、そういう情報インフラの整備状況で各地の「道の駅」のサービスに差が出るのではないのでしょうか。実は、

「道の駅」は、
まちのアンテナショップであり、癒やしの場。
いざというときには地域の人に寄り添い、
訪日外国人観光客にも頼もしい防災拠点の
役割が果たせるはずです。

dec Interview

とくなが てつお

1949年川上郡弟子屈町生まれ。68年弟子屈高校卒。開拓農家の二代目として酪農業に従事。87～92年弟子屈町農業委員会会長。91年～2000年摩周農業協同組合代表理事組合長。2000年4月に弟子屈農協との合併により摩周湖農業協同組合の副組合長に。同年12月弟子屈町長に就任。現在、5期目。2017年から北海道ブロック「道の駅」連絡会会長を務め、同年全国「道の駅」連絡会副会長に就任。趣味は自宅近くで楽しむ川釣りやゴルフ。



わが町の場合、道外から移住してきた新住民に先進技術に詳しい人が多く、いろいろな要望が役場にも寄せられるので、うかうかしてはいられないのです(笑)。

防災機能充実の必要性については、これまでも何度か実感してきました。一つは2016年8月の台風7号の豪雨のとき、摩周湖は約2㍓、釧路湿原は1㍓以上増水し、津別と美幌峠を結ぶ道道588号線が大規模な土砂崩れで不通になるという事態に見舞われました。このような釧路川流域一帯が被害を受けて道路網が大きな影響を受ける場合、国道沿いにある「道の駅」は、車で移動している人に被災状況や避難の受け入れ先を提供するなど避難のための情報拠点として役立ちます。

実際、それに近いことを実践したのは3、4年前の暴風雪のときでした。豪雨や地震も大変ですが、北海道で旅先のドライバーが困るのは吹雪ですね。あのときは施設内で休んでもらう以外に役場や各ホテルと連携して受け入れ先を手配しました。

このように「道の駅摩周温泉」は、いざというときの地元住民のための防災拠点であるだけでなく、外国人を含む観光客が困ったときに受け入れる避難拠点になればいい、と思っています。それがインバウンド観光の進展にもつながるのではないのでしょうか。

「釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイ」は「道の駅摩周温泉」や町と連携して、「道の駅」利用者の利用実態や情報ニーズを調査するなど観光振興に取り組んでいます。シーニックバイウェイ活動との密接な連携も「道の駅摩周温泉」の特色と言えますね。

「道の駅摩周温泉」では、シーニックバイウェイの情報提供スペースを常設しています。他の「道の駅」でこのような大きなスペースを確保しているところは珍しいので、「大きすぎるのでは」という声もあるようですが、私はそうは思わないですね(笑)。

シーニックバイウェイの活動と町とのかかわりは長く、その一つが「摩周湖クリーンウォーク」です。摩周湖周辺

の道路沿いのごみ拾いや美化をシーニックバイウェイの関係者や町民が行うもので、年1回夏に開催され、今年で15回を重ねています。

この日ばかりでなく、シーニックの若い人たちが熱心に道路景観のための活動に取り組んでいるのを見て本当に感心しているのです。われわれの若いときは時代が変わったなど。おかげさまで、観光ツアーの添乗員の人などから「このまち、きれいになりましたね」とほめられるようになりました。家の玄関を見れば、住む人の様子がわかるように、観光道路が汚ければ、その観光地はダメなのですね。道路がきれいになるとドライバーのマナーまで良くなります。



摩周湖クリーンウォークは毎年6月上旬ごろに開催しています。

実は、釧路地域の景観や道路美化については、町長になって間もないころから取り組んできました。北海道の農村景観は稲作や畑作の地帯は概してきれいなのですが、酪農主体の根釧地域はそうはいきません。釧路は積雪が少ないので、春先などは余計に目立つのです。さらに長年悩まされてきたのが、沿道の空き缶やペットボトルなどのポイ捨てです。まりも国道(国道240号)から釧路空港までの道路脇などは本当にひどかったですね。

それで北海道町村会のつながりで白糠町の棚野孝夫町長らと共に、釧路管内の行政の環境部署や企業などを回り、環境保全への連携を呼びかけました。それによって2006年に釧路圏域全8市町村で行ったのが「自然の番人宣言」です。これは釧路圏の貴重な自然環境を廃棄物の不法投棄やポイ捨てから守ろうと呼びかける宣言で、「摩周湖クリーンウォーク」も関連事業の一つとして推進してきたのです。

このような経緯もあり、シーニックバイウェイの活動には共感を持ってき

ましたし、連携を深めて「道の駅」の情報発信強化や近隣の「道の駅」との交流推進などにつながっていけばと期待しています。

北海道は全国最多の125の「道の駅」を有する「道の駅」王国。北海道ブロック「道の駅」連絡会の会長のお立場から、「道の駅」の魅力づくりのポイントをご教示ください。

地域の特色が生かされた施設にすることが第一だと思います。そして、地域の人に寄り添い、いざというときに役立つ施設であることです。運営に関しては、しっかりした人をトップに据え、行政もきちんと応援して、運営にかかわる人を育てていくことでしょう。

町のアンテナショップという役割が大きいと思いますが、地場産品を販売し、地域の商店や農家にお金が入ることが大事です。弟子屈の場合、主要農産物はビート、馬鈴薯、小麦、ソバ、摩周メロンなどですが、最近では温泉熱を利用してマンゴーやイチゴもつくっています。そういう地域ならではの物販の場でありたいですね。

周辺環境にも配慮したいですが、「道の駅摩周温泉」の場合は、水郷公園という親水公園が散策にちょうどよい距離にあります。湧き水の豊かさは道内屈指で、近年、改修して水車小屋も復活させ、トイレ設備も一新しました。これも「道の駅」の魅力の一つになっていると思います。

道内のインバウンド観光についてはまだまだ伸び代があると思いますが、町でも川湯温泉の廃業したホテル跡などを国の補助で壊し、新しい観光スポットに再生する方向を模索しています。これからは洗練された、若い感性を観光地づくりにどんどん取り入れることが必要だと考えています。



道の駅摩周温泉と隣接する水郷公園(写真)をつなぐ取り組みも始まっています。

dec地域政策研究所セミナー

道の駅の『新たなステージ』と『シーニックバイウェイとの連携』

道の駅は「新『道の駅』のあり方検討会」の提言(2019年11月国交大臣手交)により「新たなステージ」へと歩み出しました。その目指す姿とシーニックバイウェイ(以下、SBW)との連携の展開可能性について講演と事例報告が行われ、道の駅やSBWの関係者が熱心に耳を傾けました。
[2020年1月7日/TKP札幌駅カンファレンスセンター/主催:dec]

講演
1

道の駅 第3ステージへ

石田 東生 氏 (NPO法人 日本風景街道コミュニティ 代表理事)

●四半世紀の歩みをもとに

私は「新『道の駅』のあり方検討会」の委員長として提言をまとめ、これをもとに「『道の駅』第3ステージ推進委員会」が間もなく始動します。そうした立場から、これまでの道の駅の歩みと今後の望ましいあり方についてお話しします。

1993年の「道の駅懇談会」(建設省道路局)により、道の駅は「休憩・情報交換・地域連携の機能を持った、地域とともにつくる個性豊かにぎわいの場」を基本概念とし、①十分な駐車場、②清潔なトイレ、③情報提供施設、を3要件に認定が始まりました。これが第1ステージの始まりで、さらに全国に施設が増え、重点道の駅制度が始まった2013年からは第2ステージです。第3ステージは2020年からとし、それまでのさまざまな課題や新たに求められる機能を踏まえた取り組みを進めます。

●災害時に再認識された機能

道の駅の歩みを振り返ると、当初想定されていなかった機能や成果があります。第一は「災害時拠点」機能で、2004年の中部地震で「クロス10(テン)十日町」は自家発電による灯りや炊き出し、災害道路情報の提供などを行い、道の駅の価値が再認識されました。以

来、東日本大震災(2011年)、熊本地震(16年)、西日本豪雨(18年)、北海道胆振東部地震(同)、などで機能を発揮しています。第二は地域の人々に日常的に活用される「生活拠点」機能で、各地で多様な住民サービスが実施されています。第三は「地域交通拠点」でバス利用環境向上や自動運転の拠点として期待されます。第四は「インバウンド観光拠点」で、日本政府観光局認定の全国528カ所の多言語対応観光案内所のうち、69カ所は道の駅です。

2015年に道の駅は「可能性を秘めた新しい地域システム」と評価され「日本マーケティング大賞」を受賞。2016年閣議決定の国土形成計画においては「地方創生の小さな拠点」と位置づけられました。特産品販売の拠点として地域の生産者などに希望や自信をもたらしたことも大きな成果です。

一方、経営難の道の駅もあり、災害時対応の事業継続計画(BCP)の策定率が低いなど課題も少なくありません。そこで道の駅のブランド力強化のために、19年5月に「全国『道の駅』連絡会」が一般社団法人化されました。

●21世紀の日本を元気にする拠点に

わが国は平成の30年間を通じて人口減少・高齢化が進み、自然災害の激

甚化など多様な危機に直面して今や「劣化する日本」を痛感するところで。社会全体の停滞、格差拡大やデフレ進行などを前にして政治、世論、行政はおびえ、立ちすくんでいるかに見えます。しかし、日本の国力や信用を毀損するのは国債残高などではなく巨大災害であり、国土、地域、まちの強靱化が急がれるべきでしょう。道路、交通から社会経済を変革する観点からも道の駅の進展が必要と考えます。

したがって、その第3ステージのコンセプトは「地方創生・観光を加速する拠点へ」、「ネットワーク化で活力ある地域デザインにも貢献」です。2025年を目標に、①「道の駅を世界ブランドへ」=海外プロジェクト展開、多言語対応、キャッシュレスの導入など、②「新『防災道の駅』が全国の安心拠点に」=認定制度の導入、BCPの策定率向上など、③「あらゆる世代が活躍する舞台となる地域センターに」=子育て応援や地域活性化プロジェクト実施など、を目指します。

このために国などに支援充実を求め、全国「道の駅」連絡会のエージェンツ機能の強化、また、SBWと道の駅との一層の連携を図るための具体的取り組みを進める予定です。

講演
2

道の駅における情報提供再考

～ 訪問者への最適な時空間デザインが地域の魅力を高める ～

高野 伸栄 氏（北海道大学 教授）

●情報発信機能の充実を

今日は、道の駅の情報提供機能について、ぜひお話ししたく時間をいただきました。道の駅の機能は①休憩機能（駐車場・トイレ）、②情報発信機能、③地域連携機能（物販・飲食など）、の3つがありますが、現状では、物販や飲食の機能が第一優先になり、必須であるはずの情報発信機能が軽視される傾向にあると思います。

例えば、最近、道の駅の指定管理団体選定で審査に当たった際も、応募団体が物販・飲食重視で、情報提供機能に関する提案力の弱さが気になりました。また、道の駅のなかには、以前より明らかに情報提供のスペースが縮小され、物販や休憩中心の施設に変わってしまったところも見受けられます。このような傾向が進んでいいのだろうか、というのが私の問題意識です。

●時空間デザインで訪問者をとらえる

そこで、道の駅の利用に関するウェブアンケート（2019年1月22～23日／道内在住者対象309サンプル）を実施しました。この結果から道の駅の平常時と災害時の利用について3機能の重要度を分析したところ、利用者は、平常時は休憩と物販を重視して情報発信機能は重視しないが、災害時は高まり、平常時に比べてその重みは2倍に増加することがわかりました。

現実には、道の駅で情報発信機能を求

める人は数％程度だと思われますし、施設を運営する側も物販・飲食の売上高向上を目標ととらえ、情報提供についてはあまり成果対象と見ていないでしょう。道の駅が物販・飲食志向になるのは必然的なことに思われます。しかし、地方創生の観点から見ると、道の駅にとって情報提供機能は非常に重要であり、ネット社会であるからこそ、さらに重要度を増していくと考えられます。

例えば、「聖地巡礼マップ」というサイトがあり、これを検索すると道内にも147件のスポットがあることがわかります。ややマニア的ですが、このようなスポットをネットで調べて旅をする個人旅行者は増えています。つまり、従来、観光行動のために提供すべき情報は目的地間を効率的、スムーズに移動するためのものでしたが、ネット社会の今、旅行者が個人の興味で選んだスポットを訪れた際に、その地域で他に何をどのように楽しんでもらうか、その個人の行動パターンに適した情報を提供することが必要になります。それが「時空間デザイン」であり、季節、天候、時間帯、旅行者の好みにあった最適な情報を提供するということです。

これによって訪問者は地域の魅力に目覚めてリピーターになったり、SNSなど他者に発信して、より多くの人を巻き込んだりします。つまり、時

空間デザインによる情報提供は、地域が人口減少社会に立ち向かう上での重要戦略になり得るのです。だからこそ、情報提供機能を求める数％の訪問者を決して逃さないようにしなくてはなりません。

●会話のきっかけ増やし、地域を元気に

そこで道の駅の情報提供のあり方について再考を促したいのは、第一に「情報発信イコール情報提供」ではないことです。つまり、モニターやパンフレットなどを置くだけでなく、それをどのくらいの人が見ているのか、多くの人に有効な情報として伝わっているのかを確認することが重要です。

第二は、「時空間デザイン」の情報提供ができるように、ネットではなく対面的な対応を大事にすることです。季節や天候、時間帯や個人の好みにきめ細かく対応した情報を提供することで、訪問者に地域の魅力が伝わります。

第三は、訪問者の好みを知るためには、運営スタッフは積極的に挨拶や声かけをすることです。道の駅で訪問者を迎える人はまさにコンシェルジュなのであり、訪問者と視線を合わせ、会話のきっかけを増やしたいものです。このような取り組みによって道の駅は、特に人口減少地域において地域活性化の効果を発揮するのではないかと考えます。

話題
提供 1

道の駅『摩周温泉』との連携による情報発信について

桐木 茂雄 氏（釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイ 代表）

●利用実態調査に取り組む

私たちのルートは釧路湿原、阿寒湖、弟子屈、中標津の4エリアから成りますが、この取り組みは、弟子屈エリアと道の駅「摩周温泉」、そして釧路開発建設部との連携により2014年度から進めてきました。国道241号沿いの道の駅「摩周温泉」は1993年に登録され、2011年に弟子屈町により付近の民間観光施設を改修して現在の施設がオープンしました。多くの道の駅で飲食スペースが重視されるなかで、この施設は改修時の補助金の関係でレストランが設けられず、町が軽食などのテイクアウトコーナーを増築して補っています。

私たちはルート活動の検討や地域の魅力向上のために、道の駅利用者の課題やニーズを把握したいと考えていましたが、道路管理者（釧路開発建設部）も道の駅の中泊、長期滞在者の増加傾向への関心を高めているということで、2014・15年度の夏の繁忙期に協働調査を計画しました。

●情報ニーズに応える「てしかが情報掲示板」

調査では、私たちがナンバープレー

ト調査を行い、釧路開発建設部により夜間滞在者に対するヒアリング調査などが実施されました。その結果、8月盆時期の駐車場は収容率が109%から140%と飽和状態で、路上駐車や身障者スペースへの駐車も確認されました。また、夜間滞在者の多くが道内滞在日数30泊以上の長期旅行者であり、道の駅の滞在理由は「トイレがきれい」、「安全性が高い」などが多く、情報ニーズでは道の駅周辺の入浴施設や飲食施設が高いことがわかりました。この結果を踏まえ、道の駅の観光案内所が閉まる18時以降の情報提供方法を課題とし、取り組みを進めました。

2016年度には、24時間トイレの前に「てしかが情報掲示板」を設置し、入浴、飲食、宿泊施設などの施設単位の情報カードを置いて、終日提供できるようにしました。このカードの持ち去り枚数の調査やヒアリングから、情報掲示板は多くの利用者に有益と受け止められ、特に入浴施設への情報ニーズの高さが確認できました。さらに17年度にはカードに割引などのクーポン機能をつけ、追跡調査をしたところ、配布数5,362枚に対して利用者数は259枚（19年6～10月）で定着方向であり、

協力施設からも概ね好意的な反応を得ることができました。

●SBW情報提供スペースも開設

18年度には、道の駅と町の連携により、道の駅内にシーニック情報提供スペースを設置しました。利用者には非常に好評ですが、配布する情報媒体が不足するという課題も生じています。また、19年度には「てしかが情報掲示板」で隣接する中標津町の情報カードも提供するなど情報提供に関する試行を重ね、手応えを得ています。

19年度は、道の駅の夜間滞在者などの調査を踏まえて有料車中泊エリア設置の実証実験を実施しました（1日1台1,500円・3台分・8月5～19日）。一度、離れると他の車が入って戻れなくなるという利用者の声に応えたもので、これにより町内での移動がより自由になります。20年度はさらに台数、期間を増やして実施する計画で、全国の道の駅で役立つ先駆事例となるよう、課題を十分踏まえて試行を続けたいと思います。

話題提供2

道南エリア及び宮崎県の日本風景街道との連携事業について

長谷川 幸輝 氏（道の駅 北前船 松前 駅長）

●豊かな地域資源を9町連携で発信

どうなん追分SBWルートのエリアは渡島、檜山地方の9町で、松前神楽や江差追分に代表される個性的な歴史・文化と海、山の景観、食文化という豊かな地域資源に恵まれています。ルートのテーマは『『ひと』と『みち』がつなぐ北の大地の地域力再生へのチャレンジ』で、「SBWの主体的関わり、各地域の個別活動との連携、ルート内の情報共有及び発信」を運営方針に、エリアの8町が国道沿いにあるという強みを生かし、活動を行っています。

エリアでは道の駅との連携も深まり、私が駅長を務める道の駅「北前船松前」は、①「秀逸な道」区間に立地、②駐車場はビューポイントパーキングに登録、③展望テラス「うみ風テラス」はシーニックデッキに登録、と景観の良さを軸にSBWと連携しています。

●サイクルツーリズムの拠点を目指す

ルートでは道の駅との連携を促進するため、2018年度に「どうなん道の駅連携事業」が実施されました。すでに17年度に「どうなんフットパス事業」により9町の散策マップを作成し、各道の駅に設置していましたが、さらにサイクルツーリズムの観光拠点の整備と連携を目指しました。連携対象は9町の道の駅（奥尻町は「奥尻島フェリーターミナル」、江差町は「えさし海の駅開陽丸」）で、①専門学識者による

道の駅視察、②道の駅対象のヒアリング、③ワークショップ意見交換会、を実施して現状課題を確認する一方、観光拠点に向けた具体的取り組みとして①サイクルサインボード、サイクルラックなどの整備、②サイクルモニターツアー実施と特産品の提案、③「どうなん追分シーニックdeナイト」の同時開催、を行いました。

石田東生氏らによる学識者視察では、その提言を自治体や現場関係者に還元し、それを踏まえて各道の駅にヒアリングを行いました。さらにワークショップで意見交換し、サイクルツーリズムへの取り組みや連携のあり方などを検討しましたが、そのなかで特にガイド養成の重要性が課題として共有されました。

一方、連携の具体的取り組みでは、SBWの事業で18年4月に立ち上げられた「歴史・文化を活かした南北海道サイクルツーリズム推進協議会」が中心となり、各道の駅にサイクルラック、空気入れ、簡易工具などを設置し、6町を周遊するモニターツアーを主催。特産品を生かしたエイド食の提案も行われました。12月には5町の道の駅の連携で「どうなん追分シーニックdeナイト」を開催。冬場の閑散期ですが、SNSなどを活用して集客を呼びかけました。

道の駅は販売本位に個々の施設が孤立しがちですが、今回の取り組みで

は意識的な呼びかけによって連携を進展できたと思います。

●特産品交流で魅力を高める

2018年1月、ルートのメンバー2名が日本風景街道宮崎校に参加し、宮崎県の道の駅「酒谷」を視察したことから、同駅と道の駅「北前船松前」との交流が始まりました。同年6月から10カ月にわたり、シーニックバイウェイ支援センターのバックアップにより特産品交流として松前で専用ワゴンにより宮崎の特産品を販売しました。9月には宮崎から日本風景街道「日南きらめきライン」と道の駅酒谷の関係者が来道。私たちのエリアを視察し、交流を深めることができました。宮崎の特産品である酒谷茶や柚子胡椒、地鶏の炭焼きなどの販売にも弾みがつき、松前でも好評を得ました。

私たちの道の駅では今後、旅行者、地域の人々の両方のニーズを考え、休憩場所、情報提供の場所、コミュニティの空間として活用してもらい、エリアポイントとして魅力を高めていきたいと思っています。また、SBWとの連携の取り組みにより、情報共有の重要性が実感されましたが、それを意識しながら連携を推進していきたいと思っています。



【写真左から】

石田 東生 氏
（NPO法人 日本風景街道コミュニティ 代表理事）

高野 伸栄 氏
（北海道大学 教授）

長谷川 幸輝 氏
（道の駅 北前船 松前 駅長）

桐木 茂雄 氏
（釧路温泉・阿寒・摩周シーニックバイウェイ 代表）

司会：原 文宏
（dec地域政策研究所 所長）

質疑応答・意見交換

講演と話題提供を踏まえ、フロア全体で質疑や意見交換が行われました。主なやりとりをご紹介します。

原 道の駅「摩周温泉」の「てしかが情報掲示板」は全国に広げたい。道の駅とSBW連携＞好事例です。運営母体の置き方など今後の取り組みは？

桐木 運営母体については特に考えていません。国道を通る人をいかに道の駅という「網」でとらえて町のなかに引き込めるかを基本に今後も取り組みたい。QRコード活用のクーポン発行の方法ができあがったところで、今後、外国語版もつくろうと考えています。

石田 道内の＜道の駅とSBW連携＞の好事例は、話題提供の2事例以外にもあるのでは？

会場から 萌える天北オロロンルートでは、留萌港近くの船場公園で登録協力団体が販売活動などを行っていましたが、その場所で道の駅整備が進められています。全線開通した深川・留萌自動車道と一般国道の結節点に位置し、重点道の駅にも選定されました（2020年度登録開業予定）。多角的に情報発信を図ることや英語対応可能なコンシェルジュなど適切な人員配置も検討されています。

高野 ＜道の駅とSBW連携＞を進めるために、SBWから道の駅に働きかけるには誰に掛け合うのが適当ですか？

桐木 私たちの場合は自治体の長が最終判断していましたが、取り組みが進むなかで、道の駅の駅長を中心に進

めてよい、という許可が出たようで、今は駅長に相談しています。

長谷川 町の委託による指定管理者として道の駅の運営をしており、SBWとの連携については役場の観光課、観光協会を含めて協議し、具体的取り組みは私たちに任されています。

石田 道の駅の運営はやるべきことが多岐にわたり、駅長やスタッフは大変多忙と聞いています。SBWにサポートできることは？

長谷川 駅長の仕事は裏方業務も多く、超多忙です。黒字経営を目指して物販や営業部門を重視しがちですが、公共の場としての大義名分をスタッフ一同、認識するようにしています。SBWとの連携によるサイクルツーリズムで多くの方に来ていただきたい。

会場から 石狩市厚田区の道の駅「あいろーど厚田」の駅長の秋井です。公共性と収益性の兼ね合いは非常に厳しいです。当駅は地場の物産振興でテナントに入ってもらっていますが、収益は直営物販店が頼りです。情報発信は薄いののが現状ですが、収益を上げてスタッフを増やせれば改善できるのでは。誘客は、SBWで連携を広げ、広域的につながらないと単独ではなかなか難しいです。

原 松前の道の駅では宮崎県との特産品交流を進めていますが、近隣の道

の駅と間の特産品交流は？

長谷川 ルートの各駅の個性を生かすために、あえて隣の特産品は置いていません。松前と歴史的ゆかりがある福島県の道の駅「伊達の郷りょうぜん」とは大間のマグロの解体ショーをするなどそれぞれの特徴を生かした特産品交流を行っています。

高野 当初、道の駅の運営はしびりが緩くて、収益性、公益性に関して多様な取り組みがありました。この面での第3ステージの方向性はのでしょうか？

石田 収益性と公益性のバランス、という問題ではなく、まずは黒字経営が大前提です。そのために、いろいろな主体と連携して環境を整えることが大事で、それが私たちの任務と心得ています。キャッシュレス販売の導入もその一例で、後は自販機の扱いについて民間企業との連携で多様な選択肢を設けることも考えています。

道の駅同士の連携の今後については、市町村合併で市内に8つ道の駅がある千葉県南房総市と岐阜県高山市の動向が参考になります。いろいろな経営タイプの道の駅が含まれますが、経営母体を統合して、6次産業化による利益率向上の手法の共有を模索しています。今後、道の駅同士の連携の価値を具体的に求める動きは加速すると思います。